

縄文土器（「日本の伝統」岡本太郎）

① 縄文土器の美の特徴

- ・嫌ったらしい美しさ（荒々しい不協和音がうなりを立てるような形態や文様）
- ・日本的美観の断絶（弥生時代以降の和やかで繊細な日本の伝統美とは全く異質）
- ・現代日本人は忌避（こってりとして複雑な、嫌ったらしいほど逞しい美観）

「近世日本の小賢しい、平板な情緒主義は言うまでもありません。大陸から直輸入され、そのまま伝統の中に編入されて、我が国の最大の古典としてまつりあげられている、豪華で壮大な奈良時代の仏教美術などをながめても、素朴な段階にあった当時の日本とそぐわない、爛熟した大陸デカダンス文化の、おもく居丈高い気配に、なにか後味の悪さを感じたりしました。さらにさかのぼって、古墳時代の埴輪文化のあまりにも楽観的な美観にも、現代日本人にそのまま通じる、イージーな形式主義を見て取り、絶望したのです」

「われわれが縄文土器のあのたくましさ、純粹さに触れ、今日瞬間瞬間に失いつつある人間の根源的な情熱を呼び覚まし、取り返すならば、新しい日本の伝統がより豪快不敵な表情をもって受け継がれるのです。そうありたい」

② 縄文土器の美の源

・縄文時代 - 狩猟生活（移動）

「獲物を追っかけて突き進み、仕留める。躍進、闘争はその根本にある気分です。それは極まりなく激しく、動的であり、殆どむごたらしいほど、積極的です」

不安と孤独と偶然を土台とする世界観

・弥生時代 - 農耕生活（定住）

「農耕生活は年々が一定の規律を持った繰り返しです。もはや闘争は不要です。カレンダーによる周到な計算と忍耐強い勤勉がその生活条件となるのです」

安定と均衡、節度と従順、必然と依存を土台とする世界観

「縄文土器のもっとも大きな特徴である隆線紋は、激しく、鋭く、縦横に奔放に躍動し繰り返し広げられます。その線を辿っていくと、纏れては解け混沌に沈み、こつ然と現れ、あらゆるアクシデントを潜り抜けて、無限に回避し逃れてゆく。弥生式土器の文様が穏やかな均衡のなかに納まっているのに対して、明らかにこれは、獲物を追い闘争する民族のアバンチュールです。……

いったい、このような反美学的な、無意味な、しかも見る者の心情を根底からすくい上げひっくり返す、とてつもない美学が、世界の美術史を通じて見られるでしょうか」

「このすざましさに心を引き裂かれながら、いつのまにか、身のうちに異様な諧調が共鳴し始めます。それは生ぬるい気分では絶対に捉えることのできない、力と均衡なのです。非常なアシンメトリー。その不協和音のバランス。これこそ、われわれが縄文土器によって呼び覚まされ、身に取り入れなければならない、大きな伝統的感動であると信じます。」

縄文土器（「日本の伝統」岡本太郎）

① 縄文土器の美の特徴

- ・嫌ったらしい美しさ（荒々しい不協和音がうなりを立てるような形態や文様）
- ・日本の美観の断絶（弥生時代以降の和やかで繊細な日本の伝統美とは全く異質）
- ・現代日本人は忌避（こってりとして複雑な、嫌ったらしいほど逞しい美観）

「近世日本の小賢しい、平板な情緒主義は言うまでもありません。大陸から直輸入され、そのまま伝統の中に編入されて、我が国の最大の古典としてまつりあげられている、豪華で壮大な奈良時代の仏教美術などをながめても、素朴な段階にあった当時の日本とそぐわない、爛熟した大陸デカダンス文化の、おもく居丈高い気配に、なにか後味の悪さを感じたりしました。さらにさかのぼって、古墳時代の埴輪文化のあまりにも楽観的な美観にも、現代日本人にそのまま通じる、イージーな形式主義を見て取り、絶望したのです」

「われわれが縄文土器のあのたくましさ、純粹さに触れ、今日瞬間瞬間に失いつつある人間の根源的な情熱を呼び覚まし、取り返すならば、新しい日本の伝統がより豪快不敵な表情をもって受け継がれるのです。そうありたい」

② 縄文土器の美の源

・縄文時代 - 狩猟生活（移動）

「獲物を追っかけて突き進み、仕留める。躍進、闘争はその根本にある気分です。それは極まりなく激しく、動的であり、殆どむごたらしいほど、積極的です」

不安と孤独と偶然を土台とする世界観

・弥生時代 - 農耕生活（定住）

「農耕生活は年々が一定の規律を持った繰り返しです。もはや闘争は不要です。カレンダーによる周到な計算と忍耐強い勤勉がその生活条件となるのです」

安定と均衡、節度と従順、必然と依存を土台とする世界観

「縄文土器のもっとも大きな特徴である隆線紋は、激しく、鋭く、縦横に奔放に躍動し繰り返し広げられます。その線を辿っていくと、纏れては解け混沌に沈み、こつ然と現れ、あらゆるアクシデントを潜り抜けて、無限に回避し逃れてゆく。弥生式土器の文様が穏やかな均衡のなかに納まっているのに対して、明らかにこれは、獲物を追い闘争する民族のアバンチュールです。……

いったい、このような反美学的な、無意味な、しかも見る者の心情を根底からすくい上げひっくり返す、とてつもない美学が、世界の美術史を通じて見られるでしょうか」

「このすざましさに心を引き裂かれながら、いつのまにか、身のうちに異様な諧調が共鳴し始めます。それは生ぬるい気分では絶対に捉えることのできない、力と均衡なのです。非常なアシンメトリー。その不協和音のバランス。これこそ、われわれが縄文土器によって呼び覚まされ、身に取りられなければならない、大きな伝統的感動であると信じます。」

③ 縄文土器の空間感覚

・驚くべき空間性

縄文土器における空間処理は、彫刻を新しい次元に飛躍させた、二十世紀の抽象主義彫刻家たちの空間構成にすこしも劣るばかりでなく、かえって激しい

・「狩猟期に生きた人間の感覚は、きわめて空間的に構成されているはずで、獲物の気配を察知し、しかも的確にその位置を確かめ、掴むには、鋭敏な三次元的感覚が居るに違いない。しかもそれによって生活した狩猟期の民族が、我々の想像をはるかに超えた、鋭い空間感覚を備えていたことは当然です。そういう生活無しにあのように的確、精緻な空間のとられ方は考えられません」

(アルタミラノ岩絵の立体的迫力に共通する)

・「いわゆる日本的形式とか美意識と言うものが、今日ではもうなんとなく古めかしいのに、時代的には最も遠く離れた、いわば歴史のどんずまりにある、縄文文化の積極性や、空間感覚が今日の我々にピンとくる。これは素晴らしい」

・「私は久しく抑えられ、貯められていた、しかし確かに我々の心のように、の深み、底の底のほうに熱気のように潜んでいる、偽ることのできない情熱の、たぎる激しさを再び芸術の上に取り戻さなければならぬと思うのです」

④ 縄文土器の宗教性

・異様な神秘性 (呪術の世界)

「原始社会においては、すべてが宗教的であり、呪術的です。・・・全く偶然性に左右される狩猟生活は、未開な心象に超自然的な意思の働きを確信させます。すべてに霊があり、それが支配している。その好意と助けにすがらなければならない。この見えない力に呼びかけるのが、呪術です」

・「原始時代においては物質的、また精神生活のすべてが宗教によってささえられています。もちろん、あらゆる美観も、ちょうど今日の美形式が、すべて資本主義的生産様式の上に成り立っているように、ここでは宗教的意義を負っているにちがいない。土偶・土面・土版などはもちろんですが、日常の用具である土器の携帯から文様にいたるまで、厳格なイデオロギーを担わされていると考えなければなりません。それが実用的な目的だけで作られているのではないことは、形態を見れば一目で明らかです。そしてまた、あの複雑で怪奇な縄文式様式が、現代の「芸術のための芸術」のように、単に美学的意識によって、作り上げられたものでないことも確かです。それは強烈に宗教的、呪術的意味を帯びており、したがって言い換えれば、四次元を指し示しているのです」

⑤ 現代芸術における縄文土器の意味

・「この激しく強い神秘的な美観の根底にある精神、そのドラマの本質が他紙にはピリピリと感じ取れるのです。それは狩猟期の生き方そのものうちにある悲劇的な複合精神、アンビヴァランス (たとえば、一つの対象に愛と憎しみのような相反する感情が同時に、混沌として心の中に存在すること) です。

狩猟民族にとっては、獲物は激烈な闘争の相手であり敵です。ところが彼らはそれを糧に生きているのです。獲物がいないということはただちに飢えであり死を意味します。彼らは全存在をそれにゆだね、かけている。だからこそ獲物は彼らにとって、神聖な存在、つまり神なのです」

- ・「そういう人間生命のギリギリの矛盾、そして逞しい生命力を今日見失いがちです。しかし、これこそ、直視しなければならない本能の深みであり、これは芸術においても大きな問題なのですが」
- ・「そこに不安と危機があります。強烈な矛盾に引き裂かれ、それに堪え、克服する人間の強靱な表情を縄文土器ほど豊かに誇り、示している芸術を私は知りません」

我々はそこから何をひきだしてくるか？

- ・「あたかも彼らが超自然の世界と交渉したように、同じく不可視ではありながら、強く現実的に迫ってくる問題に触れています。それは単なる美学に関わりありません。二つの世界が冷たくまた熱く対立し、予告もなく水爆が炸裂し、突然奇怪な経済恐慌が起こります。それはさながら原始社会における精霊のように、良いにつけ悪いにつけ、実際に我々の生活におそってきているのです」
- ・「このようなことは、芸術と直接関係がないように、一応切り離して考えているところに、「芸術のための芸術」の迷いがあるのです。単なる趣味、嗜好を土台としたオプティミスティックな味の芸術は、芸術家が職人として、社会現象と切り離されていた手工業時代の遺物だ」
- ・「この不可視であり、だが生々しい現実的な事実正面からぶつかり、その意味を見極め、己自身を引き裂かない限り、現実に対して、また芸術にも決定的に無力です」
- ・「縄文土器に見る「平気で、明朗で、屈託のないあり方を、我々は生きる方法、そして芸術の内容としてつかみ取るべきです」
- ・「いわゆる「日本的」伝統などとうそぶいていた、弱弱しくひらべたい、あきらめの情緒主義や形式などは、新しい現実に立ち向かう力を失っています。これからの人は、モリモリとした生命力、その英知をもって、いわばこの袋小路、封建日本のじめじめした雰囲気を打ち破って、新鮮な時代を創りあげてゆかなければならないのです」

縄文土器

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

縄文土器（じょうもんどき）は、北海道から沖縄諸島を含む現在でいう日本列島各地で縄文時代に作られた土器である。

縄文時代の年代は流動的ながら、約1万6000年前から約2300年前とされる。

目次

- 1 概要
- 2 使用目的
- 3 特徴
- 4 土器の年代
 - 4.1 縄文土器（縄文時代）の時期区分
- 5 土器の系統
- 6 縄文土器の文様の種類
- 7 縄文土器の形
- 8 中国の縄文式土器
- 9 脚注
- 10 参考文献
- 11 関連項目
- 12 外部リンク



深鉢形土器（火焰型土器）縄文中期 新潟県十日町市笹山遺跡出土 十日町市博物館蔵 国宝



深鉢形土器（火焰型土器）縄文中期 伝新潟県長岡市関原町馬高遺跡出土 東京国立博物館蔵^[1]

概要

縄文土器は大森貝塚を発掘したモースによって見出され、英文報告書で cord marked pottery（索文土器）とされた。しかし貝塚土器、あるいはアイヌ式土器など様々に呼ばれ、結局、縄目文様という発想から命名された「縄文式土器」の用語が定着した。1975年（昭和50）、佐原真は土器の名称に「式」を使うことの不合理を説き、「縄文土器」の名称を使うことを提唱し、以後、一般化した。編年作業が精緻化した今日においては「縄文土器」の用語が用いられることが多く、その場合、「縄文（縄目文様）が施された縄文時代の土器」という意味（狭義の縄文土器）と「縄文時代の土器一般」（広義の縄文土器）という2つの意味で用いられる。また、佐原真など一部の研究者で**縄紋土器**の用語を用いているものもある。これは、土器表面に施された模様が一種の紋章の意味を成しているのではないか、という考えによるものである。

一般に、縄文土器の作られた時代が縄文時代であるが、日本列島における土器の出現＝縄文時代の始まりであり、明確な稲作農耕文化に伴う土器型式は弥生土器とされる。また、上述のように、縄文時代の土器すべてが縄目文様を施すわけではなく、さらに縄文時代を通じて土器に

縄文を施さない地域もある。そのため、縄文時代に作られた土器をもって縄文土器であるという定義もある。このような定義は再帰的かつ同語反復にも見えるが、あまりにも多様で、土器であるという以上の普遍的定義が難しい縄文土器の実態を考えると、境界領域では納得せざるをえない。

使用目的

主に食料を煮るため、あるいは貯蔵するために用いられたと考えられる。縄文土器が出現した時代は、ナウマンゾウのような大型哺乳類が日本列島で絶滅した時期と重なるため、当時の住民は主食を獣肉から木の実へと変更する事を余儀なくされた。木の実の多くは収穫時期に限られるために、貯蔵する必要が生じた。また食べるためには加熱処理が必要な木の実も多く、獣肉や魚介類のように直火で炙るのは困難であるため、加熱するには調理器具としての土器が必要となった。またドングリやトチノミは食べるためには灰汁を使って渋抜きをする必要があり、そのため灰が必要であった。灰を得るために大量の草木を燃やした事が、土器製法の発見につながった。あるいは土器を製作する際に生まれた灰から、ドングリやトチノミを渋抜きする方法が発見されたと考えられる。土器の製法と渋抜きの方法のどちらが先に発見されたかは不明だが、日本列島において世界的に見て最初期に土器が普及したのは、こうした事情によると想像される。



深鉢形土器 縄文中期 東京都あきる野市草花出土 東京国立博物館蔵

特徴

いわゆる縄目文様は撚糸（よりいと）を土器表面に回転させてつけたもので、多様な模様が見られる。しかし実際には縄文を使わない施文法（例えば貝殻条痕文）や装飾技法も多く、これは土器型式によって様々である。縄文土器は表面を凹ませたり粘土を付加することが基本で彩色による文様は少ない。しかし、文様が変化に富み多く用いられ、装飾は時には容器としての実用性からかけ離れるほどに発達した。この特徴は、日本周辺の土器にはみられない。縄文土器の形は深鉢が基本であり、量的にも多い。特に前半の時期は深鉢以外の器形は希である。しかし、中頃から浅鉢のような器形が現れ、続いて注口付き、香炉形、高杯、壺形、皿形など様々な形が現れた。とくに東北地方晩期は器形の変化が多様であった。

窯を使わない平らな地面あるいは凹地の中で、やや低温（600℃～800℃）の酸化焼成のため、赤褐色系で、比較的軟質である。胎土は粗く、やや厚手で大型のものが多いが、用途や時期によっては薄手、小形品、精巧品も作られている。男性原理の象徴と考えられている石器に対して、食料の保存加工に用いる土器は女性原理に属するものであると考えられており、信仰に関わる土製品には代表的な土偶のほか、土器片を再利用して人形状土製品や鏃状土製品、土製円盤、土器片錘などが作られた。

土器の年代

土器の年代的変化を客観的にとらえようとする研究が地質学者松本彦七郎によって始められた。松本は、土器型式の違いを年代差ととらえ、貝塚の層位的発掘によってその年代順位を確認していく方法をとった。この方法を受け継いだ一人に山内清男がいた。山内は、1937年（昭和10）頃までに日本を九つほどの地域に分け、各地に約20ほどの土器型式を配列した。激しい論争の末認められ、科学としての土器研究が確立した。また、山内は、縄文時代の大きな時間的区分として、早期、前期、中期、後期、晩期を示し、後に草創期を付け加えた。

縄文時代を通じて派生した型式数は数え切れない程だが、それらを整理して様式としてまとめると70程度とされる。さらに時間軸でまとめると6期に区分され（後述）、時代を通じて概ね継続する地域文化圏ないし領域が日本列島全域で7~9あったようである。しかし、最終的にはいくつの型式に細分されるか今でも分からない。

縄文土器（縄文時代）の時期区分

- 草創期：約16,000年前～（ただし、縄文文化的な型式の変遷が定着するのは草創期後半から）
- 早期：約11,000年前～
- 前期：約7,200年前～
- 中期：約5,500年前～
- 後期：約4,700年前～
- 晩期：約3,400年前～（ただし、晩期から弥生時代への移行の様相は地域によって相当に異なる）

上記の年代は放射性炭素年代測定を校正した暦年代観に従っているが、いずれにせよ精度の高い推定は難しく、現在でも研究途上である。

縄文土器の出現はどうやら氷期が終了する前の事であり、世界的にみて非常に古いものだが、大陸側の極東地域^[2]には同時期の土器文化の存在が知られ、東アジア一帯で世界最古期の土器が同時並行的に出現したとみられており、相互の関係が注目される。

現在までに知られている日本列島最古の土器は青森県大平山元I遺跡や茨城県後野遺跡（うしろの）・神奈川県寺尾遺跡^[3]などから出土した文様のない無文土器^[4]であり、大平山元I遺跡から発見された土器の年代測定の算定は16,500年前（暦年校正年代法による）とされている。

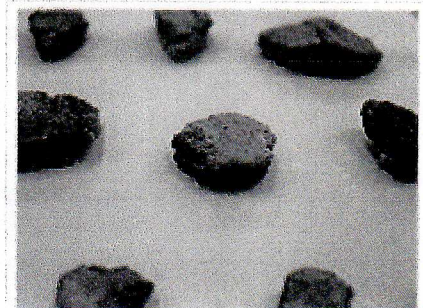
また、愛媛県久万高原町美川の上黒岩岩陰遺跡の最下層の第9層から細隆起線文土器、第6層から薄手の無文土器、第4層から押型文土器と厚手の無文土器が出土している。その中でも細隆起線文土器は約1万2000年前のもので、日本最古級の土器の一つである^[5]。

日本列島最初の土器は次の4段階をたどると考えられている。まず最初の第1段階は無文土器^[6]を特徴とし、第2段階は豆粒文土器^[7]と隆起線文土器群^[8]であり、第3段階は爪形文土器群^[9]であり、第4段階は多縄文土器群^[10]である。

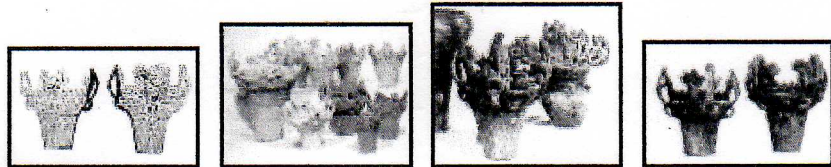
ちなみに、弥生時代になっても、東日本では縄文土器の伝統を反映した弥生土器、北海道では縄文土器の直系と言える続縄文土器、沖縄諸島では貝塚時代前半の系統を引く土器が作られた。



丸底深鉢形土器 縄文草創期 横浜市都筑区花見山遺跡出土 東京国立博物館蔵



大平山元I遺跡（青森県外ヶ浜町）で出土した草創期の土器片



中にはこのように中途半端な感じの物もある。
エネルギーの発生の中間の状態を表したものかもしれない。